

トイレが好き



奥田 早希子

OKUDA Sakiko

フリーライター

本誌編集企画小委員

中学・高校時代、私の勉強部屋は「トイレ」だった。便座の上に座布団を1枚、さらに背もたれにもう1枚。普通のイスに座った時に感じるお尻の真ん中あたりの“座面抵抗”もなく、ずっとお尻全体を受け入れてくれるような安心感のある座り心地である。適度なせまさ、ふすまから誰かに見られているのではないかという不安のなさ、ふと後ろに立っているかもしれない宇宙人を見たいという誘惑のなさ、根底に漂う孤独感、家族の馬鹿笑いの遠さ―。何をとっても、暗記にもってこいの環境であった。

6年間におよぶトイレ勉強が終わった時には、私はすっかりトイレが好きになっていた。旅行に行ってもどこに行っても、トイレが気になる。したくなくとも見るだけのためにトイレを訪問する。トイレのきれいな観光地や駅は、印象に残りやすい。逆もまた然りである。ちなみに、約25年前に訪問したJR原宿駅のトイレの汚さに「外国からの観光客に恥ずかしい」と文化度の低さをなげいた記憶がある。昨年に訪問した北海道の利尻島や礼文島は、これでもかというくらいの数のトイレが観光名所の随所に設置されており、清潔に保たれていて好印象である（やや多すぎてコストのかけすぎではないかとは思うが）。旅行に行ってもトイレチェックとは情けない、変わっている人、とのご意見もあるかと思うが、実はトイレが気になるのは万国共通、万人共通である。

「お手洗いは建物の奥にあります」とか、「次の休憩までお手洗いはありませんので、ここで済ませておいてください」とか、海外旅行ツアーに参加する

と、観光に来たのか、トイレに来たのか分からなくなるくらい、やたらと添乗員はトイレの情報を提供してくれる。国内旅行ツアーにはこれまで参加したことがないので分からないのだが、概ね似たり寄ったりだろう。不案内の土地でトイレを探すのは難しい。言葉も通じない、文字も分からない海外でなら、なおさらだ。トイレに行けるという確証がなければ、安心して旅行を楽しむこともできない。

以前、フリープランでニューヨークを旅行した際、公衆トイレが見つからずに冷や汗を流したことがある。この地は公衆トイレが少なく、とあるコーヒーチェーン店が公衆トイレの役割をしていると、現地に住む従兄弟に教わった。公衆トイレが整備されている日本はいいな、と思ったものだ。しかし、災害時のトイレとなる話は別で、残された課題は少なくない。

4月10、11日に南三陸市と気仙沼市にある3カ所の避難所で、仮設トイレの掃除ボランティアをさせていただいた。便器からあふれる汚物との対面を覚悟して行ったのだが、くみ取りが定期的に行われているためだろう、私が掃除した仮設トイレはトイレとしてきちんと機能していた。便座が汚れているトイレもあったが、避難されている方が交代で1日2回ずつ掃除されているトイレは想像したほど汚れていなかった。

問題は仮設トイレが設置されている場所である。すべて外だ（写真－1）。しかも、避難所の出入口から遠い。トイレに行くだけのために靴を履き、雨の日は傘をさし、日が暮れてからは懐中電灯を片



写真-1 仮設トイレは屋外に置かれているため、雨の日などは行きづらい（写真左から2人目が筆者）

手に歩くしかない。不便極まりない。極限まで我慢してしまう人も多いだろう。

仮設トイレはもともと工事現場用のトイレであるから、和式がほとんど（写真2）。高齢者や足腰の弱い方には使いづらいことこの上ない。高齢者を介護されているご家族の中には、トイレを使えないからおむつを希望する人もいるようである。洋式トイレで育ち、和式で用を足したことのない子ども達にとっても、和式の仮設トイレには抵抗感を持っていると聞く。まだ健脚な私としても、洋式と和式があったら洋式を選ぶ。

東日本大震災では津波で流された避難所もある。災害に強い避難所づくりは、今後のまちづくりの大きなテーマであろう。その際、耐震補強をするなどハード対策だけではなく、避難所での住民の「暮らし方」というソフト対策も重視すべきである。その一つとして、避難所トイレのあり様を検討していく必要がある。仮設トイレを屋内に設置する方法はないものか。外に設置したとしても、雨に濡れないよう行き道を囲うことはできないものか。洋式トイレの確保、仮設トイレと掃除用具のセット配送、さら

にウイルス対策用品とのセット配送など、解決すべき課題は多い。この点、日本トイレ研究所などが検証を始めているようであり、大いに期待したい。

平常時であっても非常時であっても、「快適にトイレに行けるという確証」は暮らしそのものではないだろうか。一日も早く被災された方々が安寧な暮らしに戻れることを願うのみである。

最後に、今回お世話になった持続可能な発展のための日本評議会事務局長の黒坂三和子さん、NPO法人メダカのがっこう、RQ市民災害救援センター、そして一緒にボランティアに行った東洋大学大学院経済学研究科公民連携専攻の3名の仲間たちに感謝いたします。



写真-2 高齢者、足腰の弱い人に和式はづらい